
HUNTER × HUNTERの世界

クルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HUNTER×HUNTERの世界

【Nコード】

N7183Z

【作者名】

クルト

【あらすじ】

HUNTER×HUNTERに行くことになってしまった主人公の奮闘記

旅立ち（前書き）

完全初心者が趣味で書いているものなので誤字や文面がおかしい部分もあるかと思いますが、それでもよろしければ読んでみてください。い。

旅立ち

ここはどこだ？天国か？

目が覚めると、真つ白な何も無い空間を漂っていた

「おい、お前のせいで父上に怒られたんだぞ、責任とれよ」

声のする方を振り向くとさっきまでは誰もいなかったはずなのに、偉そうな態度の子供がいた。

「いきなりなんなんだよ、それよりここどこだ」

「めんどくせえやつだな>ゴツン<？)><」

「八つ当たりするでない、お前のミスであろう」

子供の後から光と共に立派な髭を生やした爺さんが現れ、杖で子供の頭を叩いた。

「いきなり何するんですか父上」

「もういい、お前は黙っておれ、少年よいきなりでことで混乱していると思うが」

落ち着いて聞いてくれないだろうか」

取り乱しても何も解決しないだろうと思ひ。

「分かったまずこの状況を説明してくれ」

「まず自己紹介からするかのうわしは神じあ、

そしてこのバカ息子に人間界の寿命の管理を任せていたんだが、

このバカ息子のミスでおぬしの命の源であるロウソクを消してしまつたのじあ、

本当に申し訳ないお前も謝らんか」

「すみませんでした」

「どうゆうことだよそれ！」

「こんなこと絶対にあつてはならんのだじあがと言つておぬしを生き返らせる訳にもいかんだ、

そこで二つの選択肢を選んでもらう、一つはこのまま天国に行くか、もう一つは別の世界に行ってもらう、

その世界はマンガのHUNTER×HUNTER×HUNTERじゃもちろん謝罪の意味も込めて特典はつける2個までだ、

あと不死とかはなしじゃ

「なんでHUNTER×HUNTERなんだ？」

「わしが好きだから・・・」

「特典の内容は俺が決めていいんだな、少し考えさせてくれ」

HUNTER×HUNTERあの世界は誰がいつ死んでもおかしくない死と隣り合わせの世界だ、

慎重に考えないとすぐに死んでしまう。

「まず、努力した分だけ結果がでる体、（訓練しても結果がでないと意味がないからな）

二つ目は修行ができる空間で効果は、その空間で何年たっても年を取らないそれと修行内容にあった環境を再現できる効果をつけてくれ、これは俺の念能力とは関係ないものに

（能力のメモリーの無駄使いはしたくないからな）」

「ん〜一つ目はいいが、二つ目については少し厳しいのう、制約を付けるぞ、

無制限は無理じゃあから使えるのは1回だけ部屋の使用時間は20年」

「容姿は特典の範囲なのか？」

「それはサービスじゃあから心配ない」

「だったら白髪で目の色は緋色で」

「それじゃあどうする修行してからHUNTER×HUNTERの世界の送るでいいかの？」

「それでいい」

主人公設定（前書き）

修行及びハンター試験合格については割愛させてもらいます、
一ツ星ハンターになったところから本編は開始させてもらいます。

主人公設定

名前：クルト

性別：男

性格：慎重に考えてから行動タイプ

年齢：23歳（原作開始時）

職業：一ツ星ハンター（ブラックリストハンター）

容姿：白髪に緋色の目（緋の目ではない）

髪型は、さわやかナチュラルヘア

系統：変化系

能力：閻牙（具現化系、変化系の複合技）

日本刀の柄を具現化し柄にオーラを込めることでオーラの刃をつくる、

ほかに電気や水（蒸気、氷）風の刃に変化させることもできる、

2本具現化できるがオーラの消費量が2倍に増える。

鞘も具現化可能で抜刀術も可能

（烈火の炎の閻水をイメージして作った）

制約

・常に刃を維持するためにオーラを消費する。

・電気、水（蒸気、氷）、風の刃に変化させるとオーラの消費量がオーラの刃の2倍消費する。

・閻牙を具現化せずにオーラを電気、水（蒸気、氷）風に変化させると

威力及び効果が6割減少する。

風神雷神（変化系、強化系の複合技）

末梢神経を電気に耐えられるように強化し直接電氣流し込

み、

体に風を纏い高速戦闘を可能にした、

にオーラを電気、

闇牙の制約で（闇牙を具現化せず

水（蒸気、氷）風に変化させると効果が6割減少する）
とあるが闇牙を具現化してさえいれば
100%の効果で使用可能

（キルアの神速を参考にして作った）

制約

・1日に使用可能時間は10分で能力発動から10分たつ
と自動的に強制解除され

24時間使用不可能になる

主人公は常に日本刀を2振り常に持っていて格下相手にはそ
れで対応する。

第287期ハンター試験原作介入（前書き）

主人公設定で少しだけ追加しました、
今後もこういったことがよくあると思いますので
そこは責めなくてももらえると助かります。

第287期ハンター試験原作介入

修行を終えた俺はハンターになるために、第284期ハンター試験を受け合格した、

20年ひたすら修行したかいもありあっさり合格した、

原作が第287期ハンター試験なので原作の3年前みただ

原作に介入しよう決めていた俺は実戦での戦闘経験を積むために賞金首を探して世界を飛びまわる生活をしているとその功績が認められ

3年後一ツ星ハンターになることができた。

どうゆう方法で原作介入しようか悩んでいると

『プルルル』

携帯がなり番号を確認するとネテロ会長だった

ネテロ「クルト仕事の依頼があるんじあが第287期ハンター試験の試験官をやってくれんかの」

原作介入できるチャンスと思った俺はその依頼を受けることに決めた、

指定された場所に向かうとメンチと組んで試験官をやってくれと言われた、

会長からメンチは食の試験をするらしいから暴走しないか監視してほしいと、

ある賞金首を追っていた時にメンチと知り合い食のことで意気投合

した俺なら

暴走しても止めることができるだろうとの判断だった。

メンチ「ところでクルト試験内容は何になるの？」

クルト「薬草にしようかと思う」

メンチ「薬草ってもしかしてあれのこと？あんたもイジワルね」

試験会場となっているビスカ森林公園には香辛料で

有名なパドキアという珍味の薬草がある、

薬草を取ってくる簡単そうな内容だが問題は薬草のある場所が問題だった

魔獣の巢のすぐ近くにしか生えない薬草なのだ魔獣の強さはそれほど強くないので

受験生を試すには丁度いい内容になっている

原作でのブララの試験内容にしようと思ったが、あんなとんでもない量の豚の丸焼きを

処理できる胃袋は持っていないため、この試験内容したのであった。

クルト「メンチは何にするんだ？」

原作知識はあったが確認のために聞いておくことにする、

現段階でもブララの位置に俺がいることで原作を変えているため今後どう原作が変わっていくか分からないからだ。

メンチ「寿司にしようかと思ってね」

クルト「寿司は海鮮魚だろうここには川しかないから味にこだわるなよ、

洞察力を試す試験が味の試験に変わると意味ないからな」

メンチ「分かってるわよ、そんなことぐらい」

クルト「それならいい、そろそろ時間だな」

『ボーン』

試験開始だゆつくりと扉が開いて受験生が見えてきた原作組はちゃんと

一次試験に合格してるみたいだ主人公組に会えたことに少し感動しつつ表情に

出さないよう受験生を観察する

メンチ「おまたせ、そんな訳で二次試験は私たち美食ハンターが担当するわ」

クルト「美食ハンターって俺は違うぞ」「いいじゃないそんなこと関係ないわ」「

いや関係無いことないと思うんだが・・・まあいいか

レオリオ「美食ハンター?!」

クラピカ「美食ハンターとはあらゆる食材を探究しさらに新たな美味を創造するハンターのことだ」

さすがクラピカよく知っている、まあハンター目指すならそれぐらい知ってて

欲しいが知らないって受験者多いからな

メンチ「二次試験の課題は料理よ」

料理！

まあ気持ちは分からなくないがな、いきなり料理が課題と聞かされると、

ただそれはメンチの前では禁句だほら機嫌が悪くなった

メンチ「不満がある人は今すぐ帰っていいのよ」

メンチの言葉に黙る受験生一同

クルト「ではまず俺から課題を出すこの写真にあるパドキアの葉を取ってきたもろう、

写真は人数分あるから心配いらぬ制限時間は2時間パドキアの葉を俺に

渡したもののだけが次のメンチの試験を受ける資格を得る、

なおこの試験で他の受験生から奪うなどの行為をしたものは即刻不合格とする、

常に監視しているから注意するようにそれでは二次試験開始!!」

いっせいに散っていく受験生全ての受験生が見えなくなったのを確認して

クルト「メンチ落ち着け」

メンチ「分かってるわよ、でもあいつが」

あいつとはヒソカのことだ、俺達の姿を見た瞬間他の受験生に解らないように念で威嚇してきてるからだ

クルト「気にするなそれに狙いは俺だろあいつ俺の正体に気づいてるな」

さまざまな賞金首を捕まえてきた俺は一部のものたちには有名にな

っている、

白き閃光のクルトと言う異名までついてしまったのだ
俺の能力風神雷神を見たものがついたらしい

2時間後。

結果は忠告したのにズルしようとした奴などいたが、原作組は全員
合格していた

52名少し少なくなってしまったが仕方ないこれぐらいクリアでき
ないと

ハンターなどやっていけないからだ、

さてと問題は次だな暴走するよなやつぱり

メンチの暴走

メンチ「二次試験後半私のメニューは寿司よ」

寿司？

全く分からない受験生のためにヒントを出していくメンチしばらくすると、

403番レオリオが自身満々にレオリオスペシャルを出してきた、
どんなものか知ってはいたがあれは笑いをこらえるには苦労した
あれは料理ですら無い……………

その後も次々と料理をもってくるがこいつらセンスがなさすぎるぞ
ハンゾーが寿司を作ってきたが美味しくないからダメだった、
それを聞いたハンゾーがついに爆弾を投下した

ハンゾー「なっなんだとっ！握り寿司ってのは一口サイズの長方形
に握って

その上にワサビと魚の切り身をのせるお手軽料理だろうが……！」

あ……あこうなることは解っていたがこれでほかの受験生にバレた、
それを聞いたメンチはキレてしまい味の審査になってしまった

クルト「メンチいい加減にしろ」

メンチ「黙ってて」

これ以上美食ハンターでもない俺が言っても逆効果だと判断した俺
は、

会長であるネテロに電話をかけることにした

ネテロ「なんじあクルト」

クルト「会長の言った通りメンチが暴走し初めてましてだから言ったじあないですか美食ハンターでない俺が

何言っても逆効果だとこちらに来て会長から注意してもらえませんか」

ネテロ「しかたないの〜〜〜」

電話を切った俺はやっぱり全員不合格か会場の雰囲気最悪だ

『ドーン』

255番「納得いかねえな、とてもハイそうですかと帰るきにならねえ、

俺が目指してるのはコックでもグルメでもないハンターだ！！しかもブラックリストハンター志望だぜ美食ハンターごときに合否を決められるのは納得いかねえって言ってるんだよ」

名前を忘れたがアホが文句を言っているこいつハンターを舐めてるだろ

メンチ「美食ハンターごとき？」

まずいなメンチはこいつを殺すつもりだ、あいつの発言には俺も力チンとくるが

試験官が直接手を下すのはまずいそう思った俺は

『シユ．．．ドーン』

一瞬で数Mの間合いを詰めて255番を念を込めてないパンチで約10Mほど殴り飛ばした、

俺の動きが見えていたのは受験生だと2人だけヒソカとイルミだ

クルト「メンチにも落ち度はあるがハンターを舐めるものいい加減にしろ

貴様ごときがハンターを愚弄するな、

次の試験のことを考えて手加減したが次はないと思え!!!」

255番「何するんだてめえ」

俺が殴ったことでメンチは少しだけ落ち着いてきてるみたいだ

メンチ「255番あんたブラックリストハンター志望だといったわね、

それなのに彼のことも知らないなんてお笑いぐさね、

それにブラックリストハンター志望?笑わせんなつつゝの

ハンターの中でも最も危険な分類に入るものよあんたなんか話にもならないわ」

俺の動きや外見から判断したのかクラピカが

クラピカ「まさか.....その白髪に緋色の目のブラックリストハンター.....」

もしかして白き閃光のクルト実感23歳にして一ツ星ハンターになった」

やっぱりクラピカは知ってるみたいだな

彼もブラックリストハンター志望だから知っていても不思議じゃないからな

クルト「白き閃光と言うのは大げさだが多分それで違いない、今ハンター協会に対応もらっているからおとなしく待っている」

それを聞いたメンチはこちらを睨んでたが受験者一同は少し安心したのかさつきよりも場の空気が静かになった、
変わりにヒソカからの挑発が強くなった、

少しするとハンター協会のマークが入った飛行船が到着すると飛行船から飛び降りる人影が見える
登場がいくらなんでも派手すぎるだろ会長！

会長の説得もあり原作通り再試験になった課題は「湯で卵」
俺はこの世界の非常識さに慣れてしまっているがあんな断崖絶壁からちゅうちょなく飛び降りることのできることをできる原作組には呆れる

結果255番は戦意喪失でリタイア二次試験合格者は42名となった

第287期ハンター試験終了(前書き)

二次試験が終了した所ですが主人公は試験官であるため、試験終了まで割愛させていただきます。

第287期ハンター試験終了

二次試験が終了し三次試験会場に移動中の飛行船のとある一室
試験官であるサトツ、メンチ、クルトが集まり雑談している

メンチ「ねえ、どう思う？一度全員落としといて言うのもなんだけ
どさ、

なかなかの粒ぞろいだと思うんだけどね、私294番^{ハンター}
なんか光ってたとおもっただけだサトツさんどう？」

サトツ「んゝそうですねルーキーがいいですね今年私は私は断然99
キルア
番ですな」

メンチ「クルトはどう思った？」

クルト「ルーキーで言えば404番彼は^{クラヒカ}全体的にバランスがいいし
頭の回転も速そうだそれ意外だと44番^{ヒンカ}だなあれは異質だ」

サトツ「彼は我々と同じ穴の貉です、ただ彼は我々より暗い部分を
好むようですが」

ヒソカについては警戒しておくぐらいでいいだろう、
試験中に戦闘になることはないと思うが警戒しておいて損はないだ
ろうからな

受験者のほとんどがぐったりとして次の試験に向けて英気を養って
いる、

三次試験会場であるトリックタワーに着いた

ここから最終試験までは介入することができないので
最終試験まで念の基礎等、訓練に励むことにするツエズゲラのように
サボって基礎をおろそかにしていると後で痛い目にあうことは分か

っているので、
俺は一日たりとも基礎訓練を欠かしてない。

四次試験が終了した、合格したメンバーを聞いた俺は
少し驚いたメンバーが一名増えているからだ原作だと9名

(ゴン、レオリオ、クラピカ、キルア、ハンゾー、ヒソカ、
イルミ、ポックル、ボドロ)だった。がポンスが増えていた詳しく聞
いてみると、

レオリオのターゲットがポンスではなく、同じくポンスのターゲッ
トも

バーボンではなく他の受験生だったらしいやはり俺が介入したこと
によって

多少の誤差が出ているみたいだ原作でのポンスの死にかたに

多少の不満があった俺はもしポンスが合格し縁んがあれば
ポンスを鍛えることも有りなんじゃないかと思うようになった。

最終試験を終わった結果はゴン、レオリオ、クラピカ、ハンゾー、ヒ
ソカ、

イルミ、ポックル、ポンスの8名やはりキルアは暴走してボドロを
殺した、

ゴン達はキルアの救出に向かうようだ、俺はこれ以上ゴン達に関わ
って

原作崩壊してしまうことを避けるためにキメラⅡアント編まではじ
つくり

待つことにする今まで賞金首を捕まえる生活ばかりしていたのでゆ
つくりと

世界を見て回りたいと思い皆に挨拶をして会場を後にした。

(ちなみに主人公の原作知識はキメラⅡアントの王宮突入までしか

ない
)

出会い

最終試験会場を後にした俺はアジト（家）に戻り今後どう行動するか考えるために列車での移動中

（列車等公共の移動手段を用いる時身分証明としてハンターライセンスの提示が義務とされているが、それは同時にライセンス狙いの請負人を呼び寄せることにつながるので対応が面倒になる、それを避けるために主人公は公共の移動手段を用いる時にライセンスの提示はしないことにしている
入国の時にはライセンスの提示はしている）

時間を潰すためにまだ読みきつてない小説を時間があるので読んでいると

「いきなり何するのよあんたたち！」

『プシュ、プシュ、プシュ』

『ブ~~~~~ン』

なんだこれ蜂！くそっやっかいなこれでもくらえ！

『シュ~~~~~』

何やら外が騒がしい、気になったので声のする方に行ってみると全身黒ずくめのマスクを被った、サイレンサー付きの拳銃を持った

男たちと

無数の蜂が戦闘状態になっていた

これこの臭いは．．．．．催眠ガスか

ガスによって眠らされた蜂達が次々とおちていく

クルト「まさか．．．．．蜂．．．．．考えるのはあとだ、
とにかくこいつらを先にかたずけるか」

こいつら程度に念を使うまでもないと判断した俺は
男たちの首目掛けて手刀をはなち気絶させることにする

『シュ．．．シュ．．．バタツ』

手錠を男たちにはめて次の駅で警察に引き渡した俺は、
ターゲットになった人物を確認することにした

クルト『やっぱり予想道理か．．．．．』

現場となった一室には気持ちよさそうに寝ている少女ポンスであった
同じく眠っている蜂たちを回収し終えた俺は
ポンスが起きるのを待つために先程の小説を読み始めるのであった

（ポンス side）

最終試験を終え無事ハンターになれた私は今思えばかなり浮かれていた

ゴン達はキルア救出に向かうと言うがそんな危険なことをしたくない
私はゴンの誘いを断りハンターとしての活動を開始するために
ヨークシンシティに向かう列車に乗った

車掌「切符を拝見いたします」

切符と一緒にライセンスの提示をすると車掌が少し驚いた顔をした

ポンス「身分証明として提示が義務でしたよね？」

車掌「本物ですお返しします」

この行動によって生じる危険などこの時は
全く予想もしていなかった……

『ガチャ』

いきなりドアが開いたと思ったたら黒ずくめの男達がいきなり銃を突きつけてきた

ポンス「いきなり何するのよあんたたち！」

『プシュ、プシュ、プシュ』

いきなりのこと動揺する私が弾をよけることができたのは奇跡としかいえない、

私に攻撃してきた男達に蜂が一斉に攻撃を開始した

『ブ~~~~~ン』

なんだこれ蜂！くそつゃっかいなこれでもくらえ！

『シュ~~~~』

一人の男がはなった煙を吸ってしまった

私はろくな抵抗もできないまま眠気が襲い

眠ってしまったのであった

ポンス「(せっかくハンターになることが出来た.....)」

このあとの出会いで人生が大きく変われることをこの時は知るよしもないポンスであった

ポンス side End

ポンス「あっ……」

しばらくするとポンスが目を覚ましたようだ

クルト「とりあえず落ち着けあいつらなら俺が掃除しておいた」

ポンス「あっ、あなたは、試験官のクルトさん、

ありがとうございます」

クルト「ポンスなんでこんなことになったか分かってるか？」

ポンス「………すいません分からないです」

俺は少し呆れながらも

クルト「プロハンターになってまだ1日しかたっていないから仕方なくもないが

自覚がなさすぎる、まずライセンスを身分証明として提示したんじゃないか？」

ポンス「そうです……」

クルト「ライセンスを提示するということは、同時にライセンス狙いの請負人を

呼び寄せることになるハンター専用サイトに繋げる時も同様だ、受かったからと言って浮かれてるところいったことになる」

ポンスは顔を真っ赤にしながらうつむくのであった

ポンス「私、何もできなかった……浮かれていたのはたしかです・

「.....」

もう見てられなかった俺は

クルト「ポンス覚悟があるのならは戦うための力を教えよう、ただその力を手に入れるともう後戻りはできない」

ポンス「.....お願いします」

クルト「俺のことはこれから師匠と呼ぶように、

それと俺の言いつけはちゃんと守るように」

ポンス「はい！、師匠よろしくおねがいます！／＼／」

アジト

ポンズ「……………師匠…どこにむかってるんです？」

列車を降りた俺達は森の中を歩いている

クルト「すまん説明してなかったな心配いらない、俺のアジトだ、これから教えるのは人に見せびらかす物でないんでな、

不安だと思うが今は俺を信じてくれとしか言えない」

ポンズ「いえっ！疑ってるわけじゃなくて…」

クルト「これから教えることは早くても半年で基礎が出来ると思ってもらえばいい」

2時間ほど森の中を進んで行くと検問と20mもある屏が見えてきた

「私有地にて立ち入り禁止無断で侵入した場合の生命の保証はしかねます」

と看板に大きく書かれていた

門番がこちらに気がつき

門番「お帰りなさいませ、クルト様、そちらのお連れ様は？」

クルト「弟子をとる事になってな」

ポンスは状況をつかめていないのか唾然としている、それから多数人とすれ違い、

みな お帰りなさいませ と挨拶する

ポンス「さつきから気になってたんですけど、あの方達は？」

クルト「ここの管理を任せてるんだ」

30分ほど進むと洋風と和風の一軒家が見えてきた

ポンス「ここが師匠の家なんですか？」

クルト「ああ、そうだここら一帯は俺の私有地だから誰の邪魔も入らない、

今日は疲れただろうこの家を貸すから好きに使ってもらっていい
ポンス、君は修行にのみ集中してくれたらいい」

と言って洋風の一軒家を指さす

〈ポンスside〉

列車を降りて私達は森の中を歩いている、私はだんだん不安になってくる、

もしかして騙されているんじゃないかと思いきる恐る恐る聞いてみる

ポンス「……………師匠……………どこにむかってるんです？」

そんな空気をさっしたのか師匠が

クルト「すまん説明してなかったな心配いらない、俺のアジトだ、これから教えるのは人に見せびらかす物でないんでな、

不安だと思うが今は俺を信じてくれとしか言えない」

私は焦って

ポンズ「いえっ！疑ってるわけじゃなくて・・・」

それから2時間ほど森の中を進んで行くと検問と20mもある屏が見えてきた

「私有地にて立ち入り禁止無断で侵入した場合の生命の保証はし兼ねます」

えっ(；。！)

どうゆうこと？

黒服の女性がこちらに気がつき

門番「お帰りなさいませ、クルト様、そちらのお連れ様は？」

クルト「弟子をとることになっとな」

.....もしかしてこいつって師匠の家？

それから黒服の女性と数人とすれ違い、
みな お帰りなさいませ と挨拶する

ポンス「さつきから気になってたんですけど、あの方達は？」
クルト「ここの管理を任せてるんだ」

ポンス（なんで女性ばかりなんだろう・・・）
みな女性であることに少し不機嫌になるポンスだった

ポンス（今日はいろんなことが有りすぎた明日のためにも早く寝よう）

ポンス side End

ポンスの修行

クルト「ポンス今日から修行にはいるが、これから教える技のことを念と言っ、まずその危険性を認識してもらっ」

ポンス「危険性ですか？」

クルト「そっちに立って見てくれ、今から君を殺すと思っ、口にしたほうが分かりやすいだろっ」

ポンス「??????」

クルト「君を殺す!!!!!!」

クルトはポンスにオーラをぶつける

『バタツ……………』

ポンス「……………はあ……………はあ」

オーラの発動をやめる

クルト「大丈夫か？、少し休憩しよっ」

ポンス「……………はい」

ポンス「（何なの今のただ殺すと言われたただけなのに
師匠からまるで深海にいきなり放り出されたようなすごい嫌な感
じがした）」

クルト「何が起こったか全くわからないだろう、さっきは俺が君に向けて念を使ったもちろん手加減はしたが、もっと分かりやすくやって見ようか」

クルトはトランプを取り出すと念を込めて木目掛けて投げるとトランプが木を貫通し地面に刺さる

クルト「これが念だ、念は体からあふれる生命エネルギーを自在に操る技術のことだ、その生命エネルギーのことをオーラとも言う

普通はオーラは垂れ流し状態でそれと肉体にとどめる技術を纏言つ、纏によって常人よりも体は頑強になり若さを保つことができるようになる

大事なのはここからだ悪意をもって無防備な人間を攻撃したらオーラで

殺すこともできる、それを防ぐにはどうしたらいいと思う？」

ポンス「自分も念を覚えるですか？」

クルト「正解だ、でないと・・・」

クルトはてのひらを地面に当てオーラを放つ

『ドーーーーー』

直径3mのクレーターが出来る

クルト「肉体は粉々になる」

真っ青になるポンズ

クルト「ポンズにはまず纏を覚えてもらおう方法としては瞑想を取り入れてゆっくり時間をかけてやることになる、根気強くやることになるので覚悟すること

それと併用して肉体の強化に務めてもらうことになる、いくら強いオーラを持っていても肉体が貧弱なら強い力を手にすることは出来ない」

クルト「それでは早速始めようか」

1ヶ月後

クルト「（もう少し時間がかかると思ったがこんなに早く纏の習得に成功するとはな）」

その後もポンズは順調に絶、練、凝を習得していった

修行開始から三ヶ月

クルト「そろそろ発の修行にはいるうか強化系、変化系、具現化系、特質系、操作系、放出系の六系統に分類される、さまざまな要因から必ずこのどれかに当てはまることになる」

ポンス「あの〜どれに当てはまるかどうかどう判断するんですか？」

クルト「水見式という方法があるこの変化によって系統の判断をする、

試しに俺がやって見るぞ」

水を入れ葉っぱを浮かべたグラスを用意しグラスに向けて練を行う

ポンス「・・・・・・・・・・・・・・・・何も変化が無いようですけど」

クルト「水を舐めてごらん」

ポンス「嘘っすごく甘い！！なんで？」

クルト「水の味が変わるのは変化系の特徴だ、

これは重要なことだから言っておくが

むやみやたらと自分の系統を他人にばらすのは良くない」

ポンス「・・・・自分の系統を知られると

対策を取られることがあるからですか？」

クルト「そうだ、そのせいで命取りになることもあるから注意するように」

ポンス「なら師匠はなんで私にみせたんですか?!」

クルト「信用してるからだ、短い間だけ君を見ていて

信用できると思ったから見せたそれだけだ」

ポンス「ありがとうございます／＼／＼」

クルト「ポンスもやってみるといい」

ポンスが練をすると．．．．．変化がないように見える

ポンス「味も変わってない私才能がないんですか．．．．」

クルト「よく見てみるといい不純物がみえるだろこれは
具現化系の特徴だ、この修行をこれから増やしていくぞ」

ポンス「はい！」

さらに半月後．．．．．

クルト「ポンスこれで基本となる四五行が終了した、
裏ハンター試験合格だ」

ポンス「裏ハンター試験？」

クルト「念の習得はハンターになるための最低条件ポンスはやっと
スタートラインに立てたということだこれで卒業だ」

ポンス「ありがとうございます、でもよかったですらなんです
がこれか
らも

修行を付けてもらえませんか？」

クルト「．．いいだろう、ただ今までよりも厳しくいくぞ」
ポンス「はい！／／／」

第287期ハンター試験より2年がたった

ポンスの発が形になったので俺はハンターとしての活動を再開した、
幻獣ハンターとしての活動をするものだと思っていたポンスは
ハンターとして俺のそばで学びたいと懇願され断りきれなかった俺は
今もまだポンスと共に行動している

クルト「（あんな涙目で言われたら断れないだろう．．．．）」

キメラⅡアントまであと1年

（主人公が原作介入したことによりヨークシンシティ編、キメラⅡ
アント編の

時期がずれています主人公はキメラⅡアントまで介入しないように
決めていたが

巻き込まれていくのでご了承ください）

ポンスの能力

名前：ポンス

性別：女

年齢：18歳（ハンター試験合格時）

職業：プロハンター

系統：具現化系

能力：雀蜂スズメバチ（具現化系）

切る、刺すなどすると蜂の羽のような模様

（蜂紋華ほうもんか）が現れる

蜂紋華が現れている間に、攻撃が傷に当たると

相手を10分間強制的に絶の状態にする

（ブリーチの碎蜂の斬魄刀の雀蜂）

制約

- ・蜂紋華が現れるのはポンスが飼育している蜂の数まで。

- ・具現化を解除及び攻撃があたってから5分たつと

- 蜂紋華が消えてしまう。

- ・蜂紋華が消えてしまった所に攻撃しても能力は発動しない。

い。

スピアーズ（操作系）

蜂を操作し、操作した蜂の視覚、嗅覚を共有できる、

ポンスを刺すことで5分だけ

ポンスの身体能力が1.5倍に増えるただし、

制約にて（攻撃と判断される行動を蜂に命令すると蜂が

死んでしまう）

とあり実行後には蜂は死んでしまう

制約

可能。

- ・自らが卵から育てた蜂でないと操作できない。
- ・蜂は10匹までしか操作できず、常に10匹しか飼育不

可能。
(例：蜂が2匹死んでしまうと2匹新たに卵から育てることが可能)

- ・攻撃と判断される行動を蜂に命令すると蜂が死んでしま

- う。
- ・操作可能範囲は半径5kmまで。
- ・蜂1匹が物を運べる重さは5kgまで。
- ・蜂の針には毒がない。

主人公と修業中毎日組手をしていたため、近接戦闘が得意になっています。

念能力に関する基本的な説明（HUNTER×HUNTERを読んだことのない

システム）

・強化系

モノの持つ働きや力を高める能力。主に自分自身を強める能力者が多い。

自分自身を強化すると、攻撃力だけでなく防御力や治癒能力も高まるため、

戦闘面では最も安定して強いシステムとも言われている。

水見式ではグラス内の水の量が変化する。

・放出系

通常は自分の体から離れた時点で消えてしまうオーラを、体から離れた状態で維持する技術。

このシステムの能力としては、単純にオーラの塊を飛ばす技が最も一般的である。また、体外に離れた人の形などに留め操作系の能力で操作するという使い方もある。

水見式ではグラス内の水の色が変化する。

・変化系

自分のオーラの性質を変える能力。

オーラに何かの形をとらせる技術も変化系に分類される。

オーラ自体を別の何かに変えるという点では、

具現化系と共通点のあるシステムであるが、

変化系はオーラの形状と性質を変化させ、

具現化系はオーラを固形化させ物に変えるという違いがある。

水見式ではグラス内の水の味が変化する。

・操作系

物質や生物を操る能力。

オーラ自体に動きを与える能力や、他の何かにオーラを流し込みその動きを操る能力もある。前者である場合、具現化系・放出系など

他の能力と併用することが多い。

逆に後者の場合は操作系能力単体で完結することも可能であるが、

道具などを操作する能力である場合、道具に対する愛着や使い込みが

能力の精度に影響することが多く、その道具を失うと

能力が発揮できなくなるリスクがある。

水見式では水面に浮かぶ葉っぱが動く。

・具現化系

オーラを物質化する能力。

オーラに形を持たせるといふ点では変化系と共通する部分がある。

オーラを物質化するほどに凝縮するには相当に強いイメージが必要である。

物質化したものに特殊な能力を付加する者が多い。

また、人間の能力の限界を超えたものは具現化できない

水見式ではグラス内の水の中に、不純物が生成される。

・特質系

他の5系統に分類できない特殊な能力。

血統や特殊な生い立ちによって発現する。

他の系統に属する者でも後天的に特質系に目覚める可能性がある。

特に特質系と隣り合う操作系と具現化系の能力者が特質系能力に目覚める可能性が高いとされている。
水見式では上記以外の変化が起きる。

〈四大行〉

念の基本となる修行。

・纏マシ

オーラが拡散しないように体の周囲にとどめる技術。
纏を行うと体が頑丈になり、常人より若さを保つことができる。

・絶ゼツ

全身の精孔を閉じ、自分の体から発散されるオーラを絶つ技術。
気配を絶つたり、疲労回復を行うときに用いられる。

・練レン

体内でオーラを練り精孔を一気に開き、通常以上にオーラを生み出す技術。

・発ハツ

自分のオーラを自在に操る技術。
念能力の集大成。必殺技ともいわれる。

〈念の応用技〉

応用技は四大行と比べ疲労が激しい。

・周シユウ

「纏」と「練」の応用技。

物にオーラを纏わせる技術。刃物の切れ味を強化するなど、

対象物の持つ能力を強化する。

・ 隠イシ

「絶」の応用技。自分のオーラを見えにくくする技術。

「凝」を用いても、全ての「隠」を見破ることができるとは限らない。

・ 凝ギョウ

「練」の応用技。オーラを体の一部に集め、増幅する技術。

オーラを集中させた箇所は攻防力が飛躍的に上昇し、

その他身体能力も上がる。

目に集めてオーラを見ることも意味する。

熟練者は「隠」で隠されたオーラをも見ることができる。

・ 堅ケン

「纏」「練」の応用技。

「練」で増幅したオーラを維持する技術。

念での戦いは主に「堅」を維持したまま闘うことになり、

これが解けると防御力が著しく落ちるため、

よほど実力に差がない限り一瞬で敗北という状況にもなる。

維持する時間を10分間伸ばすだけでも1か月かかると言われている。

・ 円マシ

「纏」「練」の応用技。

体の周囲を覆っているオーラを自分を中心に半径2m以上広げ、1分以上維持する技術。「円」内部にあるモノの位置や形状を

肌で

感じ取ることができる。

・硬コウ

「纏」「絶」「練」「発」「凝」を複合した応用技。
練ったオーラを全て体の一部に集め、

特定の部位の攻撃力・防御力を飛躍的に高める技術。

「凝」の発展形とも言える。「凝」による強化との違いは、

「絶」を併用してオーラをより強く集中するため、

攻防力が桁違いに高いということである。その代わり、

オーラを集中していない箇所はオーラが薄くなるのではなく、「

絶」状態に

なってしまうため、攻防力は「凝」の時よりもがた落ちする。

・流リュウ

「凝」の応用技。

オーラを体の各部に意識的に振り分ける技術。

「凝」の項目にあるとおり、「凝」は他の部位の攻防力が落ちるので

リスクをとまなう技術である。

「流」による攻防力移動は、

念能力者同士の戦いにおいて基本であるとともに、奥義でもある。

ポンズの修業中のある日

「ポンズside」

修業中のある日のこと

ポンズは前から気になっていたことを聞いて見ることにした、ただ師匠に直接聞く勇氣はなかったのだ

ポンズ「あの、なんでここで働いている人が女性が多いんですか？」

執事「それは・・・・・・。クルト様を勘違いしないでくださいね」

ポンズ「それはどうゆうことですか？」

執事「クルト様は私たちの恩人なんです、

ここで働いているもののほとんどが元奴隷や虐待などを酷い扱いを受けてきたものがほとんどなんです、

クルト様はそんな私たちを救ってくださいただけでなく、

この地で暮らして行けるように配慮してくださっているんです

ですから私たちはせめてもの恩返しのために

クルト様の留守を守っているだけなんです」

ポンズ「すいませ辛いことを思い出させてしまつて

執事「いえ気にしないでください」

この日からポンズのクルトを見る目が少しずつ変わっていくのである

つ
た

く
ポ
ン
ズ
s
i
d
e
E
n
d
く

依頼

クルト「（おかしい、いつまでたっても蜘蛛の情報が入ってこない
もうとつくに幻影旅団とマフィアコミュニティの戦争が
終わっててもいい時期なのにやはり俺が関係してるのか．．．．．
少し調べてみる必要があるそうだな）」

ポンス「大丈夫ですか師匠？すごい考え混んでますけど」
クルト「少し気になることがあってな」

『プルルル』

アジトからの電話だ

クルト「どうした？何かあったのか」

「クルト様に仕事のご依頼です」

クルト「ありがとう、方法はいつもの通りで」

「かしこまりました」

ポンス「何かあったんです？」

クルト「たいしたことじゃない、仕事の依頼だ」

5時間後、一羽の鷺がクルト目掛けて飛んでくる、
足に付いた紙を回収する

クルト「ご苦労さん」

先程の方法とは伝書鷺のことだった

クルト「（これは・・・）」

手紙を見たクルトの表情が少し変わる

依頼者は十老頭

内容は幻影旅団の暗殺

まさかこんな形で介入することになるとは
予想もしてなかったのであった

十老頭からの依頼断るにしても直接あつてからでないはずいな
クルト「ポンズ、これからヨークシンに行くことになった、

今回はかなり危険な仕事だ」

ポンス「私も連れて行って下さい、足でまといにはなりませんから」
クルト「相手は幻影旅団の暗殺だと分かっててもか？」

ポンス「．．．．．幻影旅団」

クルト「依頼を受けるかまだ決めてないが
戦闘に巻き込まれる可能性が高い」

．．．．．二人に沈黙が支配する

クルト「だから>私にも手伝わして下さい<」

クルト「遊びじゃないんだぞ!!」

ポンス「．．分かってます、私の両親は幻影旅団に殺されました、
復讐してもお父さんやお母さんが喜ばないと言ったことも分かっています、

この上師匠まで居なくなっていまうかもしれないのを
黙って見てるなんてできません!!!!!!」

クルト「わかった、ただし今から言うことを守れないようなら
どんな手段を使っても追い返すからな、

まず依頼人との交渉は俺一人でやる

依頼を受けることになったら幻影旅団との戦闘は禁止する、

その代わりに蜂を使って俺のサポートをお願いします

間違っても戦おうなんて考えは起こさないように

これが守れるか？」

ポンス「はい／＼」

序章

俺は今十老頭の目の前にいる、

6大陸10地区を縄張りに行っている大組織の長達の依頼だ

慎重に交渉しないと俺が目を付けられるのは勘弁してほしいからな。

十老頭「と言うことで依頼をしたのだが引き受けてはくれないかな
クルト「幻影旅団ですか……」

俺の返答を聞いた十老頭は

十老頭「報酬が足りないと……」

沈黙が部屋を支配する、シビレをきらした十老頭の一人が

十老頭「それなら成功報酬100億ジェニーとある刀でどうだろうか？」

クルト「刀ですか」

話に乗った俺にチャンスだと思ったのか

十老頭「そうだ、君が刀のコレクターであると聞いたもんでね」

現世で日本刀に惹かれていた俺はこの世界で刀をコレクションをしていた

十老頭「君も名前を聞いたことがあるだろう……名を天空桜と言っ」

天空桜「この世でもっとも美しいとされる全てが純白の名刀だ
そしていくら物を切ろうが折れようと鞘に戻して時間が立つとまるで
新品のようになると言われている刀だ

少し考えた俺は

クルト「こちらの言う条件をのんでくれるのでしたら依頼を受けましょう」

十老頭「いいだろう言ってみてくれ」

クルト「まず天空桜は前金として頂きます、そして天空桜を取り戻そうと

計画された場合俺を敵に回すと覚えて置いて下さい……
報酬の方なんです但し俺が仕留めた証拠をそちらが確認し下さい
幻影旅団一人当たり20億ジェニーの報酬でどうでしょうか？
もちろん一人も仕留められない時は天空桜のみ頂いて
報酬は無しで結構です、依頼を受けておいて逃げることはしないので
安心してください」

十老頭「分かったいいだろう天空桜は今日中に渡すから
連絡があるまで自由にしてくれ」

交渉が終わり電話を取り出す

クルト「ポンス俺だ、依頼を受けることになった、
そこでポンスの報酬なんだが20億ジェニー振り込んでおくから
後で確信しておいてくれ」

ポンス「えっ．．．．．20億ってそんな大金私には」

クルト「これは俺からの依頼の報酬だから気にするな、

幻影旅団と直接でないにしろ接触するんだからこれぐらいは当然だ
ハンターやっていると金がいる場面も出てくるそれにハンターになって
即修行だったから懐が寂しいんじゃないのか？」

ポンス「それは．．．．．そうなんですけど」

クルト「それと約束については忘れるなよ

これが初のプロハンターとしての仕事だ気を引き締めていくぞ！」

ポンス「了解です師匠！！」

ポンスと合流した俺は5匹の蜂をポンスに付け残りを俺のサポート
に回すように

連絡があるまで細かい打ち合わせをしたのであった

連絡が来た、今回雇った暗殺チームの顔合わせをすることだ
天空桜を受け取った俺は指定された場所に向かう

部屋に入ると俺が最後のようだ、クラピカにシルバとゼノもいる

太ったマフィア「これで全員揃ったようだな、
それでは改めて十老頭からの依頼を伝える

依頼内容は幻影旅団の抹殺、今夜セメタリービルで開かれる競売に
またやつらが現れるかもしれない警備も兼ねて奴らが
現れたら始末してくれ、やり方はそつちで勝手にきめてくれ」

暗殺者1「連絡のさいのコードネームを決めておこうか」

暗殺者2「色でいいだろ、俺はレット」

暗殺者1「なら俺はブルー」

それを聞いた俺は呆れたこいつら本当にプロなのかと

ゼノ「まるでごっこじあの」

クルト「そうだな」

暗殺者1「なんか言ったかお前ら」

命知らずにもほどがある相手の力量すら分からないのかこいつらは

暗殺者2「お前らは？」

シルバ「シルバ」

ゼノ「ゼノじあ」

クルト「クルト」

暗殺者1「シルバーにゼノ？にクルト？」

クラピカが反応する、俺に気がついたようだ

(クルトは今サングラスにニット帽をしている)

暗殺者2「ゼノ？にクルト？そんな色あつたか？？」

ゼノ「二人ともただの本名じゃあ、そっちの若いのもそうじゃあろっ」
クルト「ああそうだ」

シルバ「俺の名を呼ぶのは勝手だか指図は受けない」

クルト「それは俺も同感だ」

暗殺者3「シルバにゼノ？クルト？まさかあんたらゾルディック家か！！」

それにあんたは一ツ星ハンターの白き閃光のクルト！」

ゼノ「いかにも」

クラピカ「（あれがキルアの家族か、あきらかに他の連中と威圧感が違う訳だ、

それにクルトさんまでいるとは念を覚えて改めて見てみると威圧感が違う

なんとか対抗できそうなのは残りの二人か）」

暗殺者4「別にいいじゃん呼び名なんて」

暗殺者5「.....」

クルト「とにかく俺は一人でやらしてもらおう組みたい奴は勝手に組んでやるといい」

暗殺者2「ちよっとまで、相手は」

クルト「話が無いなら俺はこれで」

そう言い残し部屋を出る、部屋を出て1時間してころ

クラピカ「クルトさん待ってください」

クルト「なんだクラピカ俺と協力しようってことか？

お前試験の時の様子が違うな場所を移すか

(ポンズ少し通信を切ってくれ)」

ポンズ「(了解です)」

クルト「ここなら大丈夫だな、お前人を殺したな……」

クラピカ「うっ……」

クルト「俺が言えたことじあないが一人で抱え込むなよ、

お前には仲間がいるだろう？今は耳に入らないかもしれないが

覚えて置いてくれ」

クラピカ「分かりました覚えておきます、

ところでクルトさんはなぜこんな依頼を？」

クルト「ブラックリストハンターをやつてるとたまに

こういった仕事の依頼もあるんだ、今回はA級の賞金首の蜘蛛だから受けたが

暗殺は俺の専門外なんで賞金首以外の暗殺の依頼は受けないさ」

クラピカ「それを聞いて安心しました、それとゴンが会いたがってましたよ」

クルト「そうかそのうちな（ゴンとはほとんど接触してないのになぜだ？）」

クルト「それよりクラピカ死ぬなよ、またな」

クラピカ「クルトさんも気お付けて」

ビルの外が騒がしくなってきた

クルト「（ポンズきたようだ外の様子を探ってくれ）」

（ポンズside）

クラピカと何をはなしたか気になるが気持ちを切り替えよう

師匠に言われて蜂で周囲を探索するとまるで戦場と化した街並みがそこにあつた

こんな奴ら私が戦うなんて考えたくない……………

しばらく探索すると刀を持ったチョンマゲ男と

素手で首をへし折っている男の二人組みを見つけた

ポンズ「（見つけました、外見的特徴は

刀を持ったチョンマゲ男とこちらは特徴はないんですが

素手で攻撃している男の二人組を発見しました、セメタリービルより

2 km 北の地点にいます」

クルト「（ありがとう、戦闘を見るのはいいが巻き込まれないよう距離を離して置くように）」

探索しか出来ない今の自分の実力に歯がゆい思いと、クルトが無事に帰ってくるように祈るポンスであった

ポンス side End

激突

ポンズの報告から相手はノブナガとフィンクスか
報告のあった場所に絶をして向かう

クルト「(あそこだな、たしかにいいオーラを纏ってるな)」

ノブナガ「雑魚ばかりでなんの足しにもならん」

フィンクス「餓鬼に逃げられたからってイライラしすぎだ」

ノブナガ「なんだと！」

クルト「(そろそろ行くとするか)」

絶を解き二人の目の前に出る

フィンクス「強そうなのが出てきたな」

ノブナガ「やつとか」

クルト「幻影旅団だな」

フィンクス「そうだと言っただら?!」

クルト「死んでもらう、お前らやりすぎだ」

言い終わると同時に堅をする、俺の堅を見た二人の表情が変わる

ノブナガ「(こいつなんて堅をしてやがる)」「
フィンクス「(これで退屈しそうにないな)」「

場の空気がいつき変わる

クルト「(二対一か出し惜しみして勝てる相手じゃないな)」「

クルト「閻牙!!!」

閻牙を具現化しオーラを流して上段の構えを取る

それに対してノブナガは円を使い居合の構えをとり、
フィンクスはファイティングポーズをとる

次の瞬間3人の姿が消える

最初に動いたのはクルトだった

クルトはフィンクスに向かい上段の構えからいつきに振り抜く
フィンクスはそれを半身で躲し左回し蹴りを放とうとしたが

クルトの斬撃が変化して突き変わる

フィンクスは攻撃を中止して右足にオーラを集中して後方に下がる

クルトが突きを放ち終わると動きが一瞬止まる

ノブナガがそのスキを見逃すはずがない

クルトの背後に回り込み居合切りを放つ

防御が間に合わないと判断したクルトは
もう1振り閻牙を具現化し防御する互いに攻撃の失敗を悟と

互いに距離を取る

クルトは防御に回した閻牙を解除し
ノブナガは再び居合の構えをとる、
フィンクスは腕を回し始めた

フィンクス「廻天、5回でいいだろう」

クルト「俺がそれを黙って見てるわけないだろ」
クルト「牙突！！」

体制を低くして放つ左片手一本突き

クルトがいつきに間合いを詰める

ノブナガ「俺を忘れてもらっては困るな」

居合切りと牙突が激突する

『キーン』

甲高い金属音が戦場と化した街に響く

背後に気配がして振り返ると腕を回し終わったフィнкスの拳が迫る

『ドゴーン』

攻撃に耐えることができなかつたのか
クルトの体が吹っ飛ばされビルに激突する

フィнкス「こんなもんかつまりらないな」

「油断しすぎだ！」

フィнкスの背後から声がするそこには
服が破れた程度で怪我一つ無いクルトがいた
フィнкスは我に帰り振りざまに
右ストレートを放とうとしたとき拳に違和感を感じる

カウンターで繰り出した右ストレートは躲され逆に左腕を切り飛ば
される

フィнкス「何しやがったてめえ!!!!!!」

フィングスの右拳が凍りついている

クルト「氷刃」

フィングスの攻撃を受け止められないと判断したクルトは
後方に飛び閻牙で受け止める瞬間に

閻牙の刃を氷に変化させてフィングスの拳を凍りつかせていた

右拳を凍らされて左腕を切り飛ばされたフィングス

傷口は凍りついていて出血は止まっているが

両手を使えないことに焦りを感じ始める

ノブナガ「フィングス下がってるじゃまだ」

文句が言いたそうな顔をするフィングスだったが
自分の左腕を拾い後方にさがる

ノブナガ「久々に面白い殺し合いが出来る」

また居合の構えを取るノブナガ

クルト「それしかないのかおまえ」

ノブナガのオーラが変化するどんだん刀にオーラが集中していく

クルト「なら俺も本気でやろうか」

クルトは黄色い鞘を具現化し、クルトから
『ジジジジジーーーー』と音がし始める

閻牙の刀身を見ると氷の刃から電気の刃に変化していた

クルトは抜刀術の構えをとる

二人の姿が消えた瞬間

血飛沫が舞う

激突（後書き）

原作キャラの口調が違うと思いますが
そこは暖かい目で見てくれると嬉しいです

血飛沫

動いたの二人同時だった

クルト「抜刀術壱之型 双雷閃」

ノブナガ「居合 烈風」

クルトの電気の刃とノブナガのオーラで強化された刀

二つの刃がぶつかる

技の破壊力が勝ったほうが生き負けは死を意味する
均衡が敗れたのは一瞬だった

互いの刃が触れた瞬間ノブナガに電流が
いつきに流れ出すいくら強化系のノブナガであっても
人間の許容量を超えた電気を浴び只で済むはずがなかった
そして青白く光る刃はノブナガの刀も斬る
互いに技を打ち終え二人の動きが止まる

辺り一面に血飛沫が舞う

先に動いたのはクルトだった

一方ノブナガは 上半身が無かった

腰から肩にかけて斬られており上半身の無く
焼け焦げた臭いを放っている
体が前のめりに倒れ、3 mほど離れた場所にノブナガの上半身があ
った

その体には何か細い物で殴打されたのか脇腹のあたりが変形している

クルトはあの一瞬で複数の攻撃を行っていた
まず電気で感電させ

ノブナガの体を刀ごと斬り抜刀による反動を利用しての鞘での一撃
ノブナガの上半身が遠くにあったのは鞘による一撃で
上半身が飛ばされたのが原因だった

その光景をフィックスは信じられないといったような目で見ていたが

次の瞬間には仲間をやられたことに対する怒りでいっぱいであった

フィックス「貴様！！！！よくもノブナガを！！！！！！」

クルト「お前達がいつもしていることだろ、
いったいどれだけの罪の無い人々を殺し不幸にしてると思ってるんだ
俺はお前達のようなやつらが嫌いなんだ」

フィックス「はあ？どの口が言ってるんだお前も俺達と同じ人殺し
だろうが！
笑わせるなハハハッハハ」

クルト「お前に教えておいてやるよ俺が一番嫌いなのは俺自身だ」
そう言い終えたクルトの表情が少し変わる
何か思い出しているのだろう悲しげな表情になる

クルト「さてと次はお前だ」

フィックス「（ああ言ってみたものの、どうしたものか）」

クルト「水刃」

水の刃に変化させたクルトがフィックスに迫る
ただしクルトの動きに先ほどまでのキレが無くなっていた

両腕は負傷しているが足には攻撃を受けていない
フィックスに当たるはずがなかった

クルト「ハッ、ハッハ」

無意味な攻撃を繰り返すクルト

フィックス「（こいつにさっきまでのキレが無い偉そうなこと
言っ
ておいて

このていどかよこれならこの状態でも殺れる）」

クルトの無意味と思われる攻撃

そこに罠があるとも知らずほくそ笑むフィックスだった……………

•
•

闘

クルトの攻撃を紙一重で躲すしフィックス

クルトの動きを見て当たりそうで当たらない状況を作り出し精神的に追い詰める戦法に切り替えたのだった

数十の斬撃が終わったところだった

キレの無い攻撃を繰り返すクルトの間合いを完全把握したフィックスは
今までが嘘のように攻撃主体に切り替える

フィックス「遊びは終わりだ、死ねよこら！！！！」

両腕が使えないフィックスは蹴りを繰り返す

とっさのことで反応しきれなかったクルトに右の上段蹴りが迫る

紙一重で躲すことに成功したがバランスを崩す

クルト「まずい．．」

そこに追い打ちをかけるように左の回し蹴りがクルトの脇腹に命中し
5 mほど吹っ飛ばされる

フィンクス「まだ死ぬなよ、これから面白くなるんだから」

フィンクス凶暴な笑みを浮かべて言い放つ

クルトがゆっくりと立ち上がる
ダメージを吸収できない状態で攻撃を受けたので
足元がフラつく

クルト「．．．．．まだまだこれからだ」

フィンクス「まだ元気だな、そうでないと面白くない」

意外なことに先に動いたのはクルトだった
しかし繰り出される攻撃は尽く躲される

だが次の瞬間フィングスの右頬にうつすらと刀傷が出来る

フィングス「(少し油断しすぎたか)」

今度は掠りもしなかった、
しかし躲した方のフィングスの表情が少しだけ曇る

フィングス「(何かがおかしい)」

クルトの繰り出される攻撃に気持ち悪い違和感を感じ始める

するとさっきまでが嘘のようにフィングスの体に斬り傷が増え始める

フィングス「(どうなってる、あいつの間合いは把握してるのにな
んで

俺は斬られているんだ)」

クルトの無意味と思われた攻撃はこの瞬間報われることになる

クルトの行なったことそれは相手の距離感を支配すること

フィックスとの戦闘が始まってクルトが行なっていたのは
刃の長さを変えることだった、

それも数ミリ単位で刃の長さを伸ばしたり短くしたり

その一見無意味と思われる行動だが

クルトの間合いを把握したと勘違いしていたフィックスにとっては
致命的だった

その結果フィックスの距離感は完全に狂わされる

そして目の前の光景に啞然とする

さっきまで死に体だったクルトが嘘のように攻撃のキレが増していく

そう、今までの行動の全てが演技だったのだった

仲間の死、両腕が使えなくなり自身の必殺技が封印された状態での
焦り

クルトの状態を見ての油断、攻撃の全てが無意味だったことに対する
精神的なダメージ

それらの要因がフィックスの距離感の悪化をさらに加速させる

混乱するフィックスは本来なら気が付いたことだったが
周りの状況に気が向いていなかった

辺り一面水浸しになっていたのだ

クルトが行なったもう一つの行動

斬撃を繰り出す時にフィックスに気が付かれないように
水の罫を張り巡らしてしたのだった

クルトが不意に距離を取り閻牙を地面に突き刺す

クルト「氷刃、氷楼閣」

フィックスの足元が一瞬で凍り付き体の自由を奪う

地面から閻牙を引き抜きそのまま牙突の体制に入る

クルト「これで終わりだ！」

フィックス「こいやこら！！！！！」

フィックスに突っ込むクルト、
するとフィックスが頭突きの体制に入る
フィックスが今出来る最後の攻撃だった

しかし、クルトの牙突が先に当たりフィックスの心臓を貫く

具現化を解除すると少しフラつくクルト

クルト「（少しオーラを使いすぎたな）」

幻影旅団を二人も相手にして無傷で済むはずがなかった

決着がついた戦場には一人佇むクルトとそれを見守る蜂たちだった。

道化

ポンス「大丈夫ですか師匠!!!」

クルト「ああ、大丈夫だひとまず・・・」

ポンス「(師匠?)」

クルト「(客だ)」

クルトに遅れて蜂の捜査網に引っ掛かったようだ

ポンス「(師匠逃げて下さい今の状態では!!!)」

クルト「(こっちはなんとかするから周囲の状態を至急調べてくれ)」

ポンス「(・・・了解です)」

「くっくくく?」

ビルの影から現れたのはヒソカだった

ヒソカ「一目見た時から恋焦がれていたよでも今じゃない？」

クルト「今じゃないとは？」

ヒソカ「今の君と殺りあっても面白くない
それに今の僕のターゲットは君じゃない？」

クルト「なら何しにきた」

ヒソカ「お礼を言いに来たんだよ？
その二人を殺ってくれたからね」

クルト「お前の目的はなんだ、
それにここにいると言うことはお前も旅団の一員か」

ヒソカ「ヒ・ミ・ツ？と本当は言いたいんだけど
お礼に教えてあげるよナイショだよ？」

ヒソカ「そうだよ、僕が旅団に入った目的は団長と戦うこと、
でもなかなか達成できなくてね困ってたんだよガードが固くて」

そう言いながら悲しそうな顔をする、しかし次の瞬間には満面の笑
みで

ヒソカ「でも君達のおかげでチャンスが巡ってきたようだ、だから応援しにきたんだよ君が頑張ってくれたら僕がやりやすくなる？」

クルト「なら交換条件だ、お前は俺のことを旅団に話さない、変わりにチャンスがあればもう一人ぐらいなら戦ってもいい」

ヒソカ「本当かい??」

クルト「チャンスがあればな・・・」

ポンス「（師匠調べましたが異常はありません）」

クルト「（ありがとう助かった、

周囲を警戒しながら集合場所に移動してくれ油断するなよ）」

ポンス「（分かっていますって、師匠こそ気お付けて下さいね）」

ヒソカ「それと君の協力者にもお礼を言っておいて、あの蜂はそうだろ??」

その瞬間寒気がするポンスだった

ヒソカ「最後に死体はフェイクじゃあまたね？」

ヒソカの姿が消えたあとクルトはノブナガとフィングスの死体を

ある場所に隠し、使い捨ての携帯から十老頭に電話をかける

『プルルル』

繋がらない

そこでクルトは重大なミスを犯していたことに気が付く

イルミによる十老頭の暗殺

この世界に来てもう何年もたっており
原作の知識が曖昧になり忘れていたのだ

即刻、証拠隠滅のために携帯電話を踏み潰す

『バキ』

ここで焦って考えても仕方ないので
ポンスとの集合場所に向かうことにする

・とある廃墟・

死体のフェイクを使ってコミュニティを欺いた旅団が集まっていた

ノブナガ、フィンクス、ウボオーギンの3名以外が

フランクリン「どうなってる？ノブナガとフィンクスは」

集合時間をすぎているのに現れない二人にイライラするフランクリン

クロロ「確かに遅いな、二人を最後に見たのはいつだ」

フェイタン「狩りに行く時ね」

シャルナーク「携帯も繋がらないから詳細も分からない、

じゃこうしようかもう一日待ってみるのってのは」

クロロ「フランクリン俺の質問に答える」

本を具現化し言う

天使の自動筆記発動

クロロがフランクリンに紙を渡すとフランクリンの表情が変わる

クロロ「詩の形を借りた100%当たる予言を持った女から盗んだ、それが今月の週ごとにかかるお前の運命の予言だ」

詩を読み終えたフランクリンが言う

フランクリン「おそらく来週4人死ぬな、

大切な暦が一部欠けて 遺された月達は盛大に葬うだろう

菊が葉もろとも涸れ落ちて 血塗られた緋の眼の血に臥す傍らで
それでも蜘蛛は止まらない 遺る手足が5本になろうとも

他のことはわからないが蜘蛛の手足つてのは
俺達団員のことの間違いないだろうってことは
5本ってことはウボオーと確定はしてないが
ノブナガとフィンクス以外にもあと4人死ぬってことだ」

ククロ「俺も占ってもらったが同じような結果が出た、
もう一つ解ったことは占いに出る暦の月が団員の番号を
表しているってことだ、菊が菊月で9月、葉が葉月で8
緋の眼のつてのは俺達のことじゃない鎖野郎のことだろ」

パクノダ「緋の眼……………思い出した眼が赤くなる連中ね」

フェイタン「生き残りがいたってことね」

ククロ「それぞれこの紙に名前、生年月日、血液型を書いてくれ」

シャルナーク「来週死ぬの僕だ、

電話を掛けてはいけない 一番大事な時につながるから
電話に出るのもすすめない 3回に一度は死神につながるから

ヒソカ「(赤目の客が貴方の店を訪れる 半身は天使で半身は死神
月達の秘密を売るといいだろう 霜月のそれが特に喜ばれるはずだ

熱い日に件の客の仲介で 逆十字の男と2人きりになれるだろう
偽りの卯月は暦からはがされる これで残りは5枚となる」

占いを読んでいるヒソカにパクノダが言う

パクノダ「どんな占いが出たのを見せて」

ヒソカがパクノダを威嚇する

ヒソカ「やめといたほうがいい、驚くから?」

パクノダ「いいから見せて」

パクノダに渡す直前に薄っぺらな嘘を発動させ占いの内容を改ざん
する

ヒソカ「赤目の客が貴方の店を訪れて貴方に物々交換を持ちかける
客は掟の剣を貴方に差し出して月達の秘密を獲って行くだろう

九本足の蜘蛛が懐郷病に罹りさらに4本の足を失うだろう
仮宿から出てはいけない貴方もその足の1本なのだから」

その場の空気が凍りつく

フランクリン「ヒソカ今週何があったか説明しろ」

ヒソカ「言えない」

シャルナーク「なぜ言えない？」

ヒソカ「それを言ったら言えない内容を言っただもどうぜんなのでや
はり言えない、
言わないんじゃない僕が言えるギリギリのラインはそこ
までだ

それで納得出来ないのなら僕も僕を守るために戦うざるえないな」

そう言い終えるとヒソカが戦闘体制になる

クロロ「ヒソカいくつか質問する、答えられないものは言えないで
いい」

クロロ「さらわれた秘密と言うのはなんのことだ？」

ヒソカ「団員の能力」

クロロ「相手の能力は？」

ヒソカ「言えない」

クロロ「相手の成り形は？」

ヒソカ「言えない？」

クロロ「お前と相手との関係は？」

ヒソカ「言えない??」

クロロ「赤目の客すなわち鎖野郎は最低でも2つの能力をもっている、

1つはウボォーを捕らえた能力、もう1つはヒソカの言動を縛っている能力

後者の能力は掟の剣と言う表現から何らかのルールを強いる能力だろう

ヒソカにあたえたルール嘘を付くなど自分に関しての説明を一切するなだろう

ルールを破ったらかの方法でヒソカの命が奪われるということだろう」

ヒソカ「僕はここに残るよ、まだ死にたく無いしね、仮宿は離れない」

フランクリン「懐郷病・・・ホームシックってことだろう、本拠地に戻ると死ぬ」

クロロ「残ろう」

この瞬間原作とは少し違う歯車が回り始めた・・・

初陣

ポンズと合流したクルト

『プルルル』

携帯が鳴るクラピカだった

クルト「何かあったのか？」

クラピカ「私のミスでゴンとキルアが旅団の人質に取られてしまいました、力を貸して貰えないでしょうか？」

クルト「詳しく話せ」

.....詳細を説明するクラピカ

クルト「いいだろうただし条件がある」

クラピカ「条件とは？」

クルト「幻影旅団団長を捕らえる時に
俺がもう一人団員を切り離して奴らの戦力を減らす
協力出来るのはそれだけだ」

クラピカ「分かりました」

クルト「これは俺からの情報だが、
刀を持ったチヨンマゲ男とジャージの男
この二人は俺が始末をつけた、他言無用で頼む」

クラピカ「．．えっ」

そこまで情報を把握していなかったのだろうクラピカが驚く

クラピカ「誰にも言いません」

電話を切ると、会話が聞こえたのかポンスが心配そうにこちらを伺う

クルト「心配するな、体の調子も戻ったチャンスがある時に
旅団の戦力を奪って置きたいんでな」

クルト「（旅団を全滅させるのは難しくても戦力を奪うことなら出
来る）」

考え込むクルト

クルト「ポンス最初の約束で旅団との戦闘を禁止すると言ったが
旅団クラスの念能力者と戦ってみるのもいい経験になるやって見る

か？」

ポンス「わ、私には無理です、あんな奴らと戦うなんて．．

クルト「昨日俺が戦ったのは旅団でも武闘派のやつだ、

今回の相手は絡めてで戦ってくる奴だ危なくなったら助ける」

ポンス「．．．．．やってみます、いややらせ

てください！！」

クルト「分かった、俺が指定した場所で待機して置いてくれ、そこに蜘蛛を連れてくる」

ポンスと別れたクルトは変装してベーチタクルホテルに向かう

「何時だと思ってるんだてめえ！！！！」

ホテルのロビーに響くレオリオだ

レオリオ「間抜けな手下を持ったおかげで俺はお先真暗だ、

目つむるのは今回だけだよ聞けよ7時きっかりだ」

クルト「(合図がそれにしてもレオリオの奴

本当に医者目指してるんだろつか．．．．

ヤクザの方がじっくりくる)」

7時まであと5秒

4

3

2

1

0!!

その瞬間停電になり照明が落ちる

クルトは閻牙と風神雷神を発動させシャルナークを狙う

突然の暗闇に対応出来ていなかったシャルナークに
電撃を浴びせ気絶させポンズとの合流場所に向かう

とある荒野

シャルナーク「(いったい何があったんだ)」

シャルナークが意識を取り戻したようだ

シャルナーク「ここは．．．君達．．．鎖野郎か」

クルトとポンスを見て言う

クルト「いや違っただが、お前らの仲間を二人殺ったのは俺だ」

シャルナークの表情が変わる

シャルナーク「お前がノブナガとフィンクスを！」

シャルナークが携帯電話を取り出して戦闘体制にはいるが
クルトの電撃で壊れていた
自身の武器が使えないことに焦るシャルナーク

それを見たクルトは失敗したと思うのだった、
ポンスに経験を積ませるつもりでこの場を用意したのに
これじゃ操作系との戦闘経験が積めない

クルト「ポンス油断するなよ」

ポンスのつて格上との初めての死合だった、
修行中クルトとは何ども組手をしたりしたが
あくまでも稽古の中でだ実戦とは違う

師匠として厳しい目でポンスを見守るクルトだった

蜂の戦い

「ポonz side」

目の前にいるのは幻影旅団両親の敵……

私は復讐しにきたんじゃない師匠に少しでも恩返ししたい
師匠に言ったらそんなこと考えなくていいと言われそうだけど
今は戦いに集中しよう

構えるシャルナーク、
クルトが戦いに参加しないと判断し右手にアンテナを持ち
ポonzに狙いを定める

ポonz「(さつき携帯電話を出して表情を変えた能力の一つなんだ
ろうか
それに手に持つてるあれはなんだろう、とにかくあれには注意した
ほうがいい)」

先に動いたのはシャルナークだった、
緊張からか動きが鈍いポonzに襲いかかる

反応が遅れたポonzの横腹にシャルナークの蹴りが入る
怯んだスキにアンテナを刺そうとする
ポonzは回避出来ないと悟りシャルナークの右腕を払い軌道をそらす

ダメージから回復したポonzが後方に飛び距離を取る

シャルナーク「意外とやるね今ので終わりだと思ったんだけど」

今の攻防で冷静さを取り戻したポonzが雀蜂を右手に発動する

シャルナーク「それが君の能力．．具現化系だね」

ポonz「．．．どうかしら」

自分の系統を言い当てられて少し動揺する

ポonz「今度は私から行かせてもらいます」

ポonzがシャルナークに突進する

シャルナークにあと2mの所で軌道を変えて

シャルナークに対して円に回りだす

ポonzが徐々に速度を上げていく

ポonzが雀蜂で左胸を狙い突きを放つと

シャルナークが回避行動に出る

しかしポonzが不意に後方に飛び

また一定の距離を保ちながら円運動をする

その後も嫌がらせとも取れる攻撃を繰り返すポonz

一向にまともに攻めて来ないポonzに
少しイライラしはじめるシャルナーク

シャルナーク「いい加減にしなよ君、僕は忙しいんだ」

するとポonzがシャルナークに蹴りを放つ

さっきまでとキレが違ったが簡単に

ポonzの蹴り足を掴むシャルナーク

シャルナークが掴んだ足を狙いアンテナを突き出すだが
先に攻撃を当てたのは意外なことにポonzだった

シャルナークの右手の甲に蜂紋華が浮かび上がる

ポonzは蹴りを掴まれてすぐに

シャルナークの右手に狙いを定めて

雀蜂を当てることに成功したのだ

蜂紋華を見たシャルナークが手をはなして距離をとる

シャルナーク「これは何かな？」

さっきまでとは違うオーラを放ち始めるシャルナーク
そのオーラに当てられたのか一歩下がるポonz

シャルナーク「もういいや、君達死になよ」

シャルナークがアンテナを自らに刺す
するとオーラの量が跳ね上がる

自動操作モード発動

使い慣れた携帯が壊れていても威力は下がるが操作可能なのだろう

さっきまでとは段違いの速さで

繰り出される攻撃についていけなくなり

一方的な展開になる

動けないポンスにとどめとばかりに右手の手刀がポンスに迫る

ポンス side End

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7183z/>

HUNTER × HUNTERの世界

2012年1月8日00時46分発行